訳注における著者名のない引用はプラトンの著書である

通宜、自分なりの注を加えてあるので、オレンジ色で示すことにする

1
「幸福であることは、時間によって増大するのであろうか。そのばあい、「幸福であることは常に現在の状態として理解されるわけであるが

というのも、道徳は「幸福であることにならない客与するものではないし(アリストテレス[ニコマコス倫理学]IX4,1166a)、それに「幸福であることは「未来にかかわりがあるのではなくて、なんらかの「状態」にかかわりがあるからである。そして、その状態は「現在」にかかわりがあり、生命の活動がそうなのである

2
だが、われわれは常に生きることを欲しているのだから、そのような欲求を満足させることができれば、それだけで幸福であることの度合おを増大していることになるであろう
と、人は言うかもしれない

しかし、もしその人の言うとおりだとすると、まず、明日の幸福の方が大きいことになるであろうし、常に後の幸福の方がより前の幸福よりも大きいことになって、もはや幸福は、徳では測定されないことになるであろう

それに、神々やさえも、今は以前よりも幸福であるが、その幸福は未だ完全ではないっまでてもそれ以上になるであろう。

そしてさらに、欲求も、そのめざすものを獲得すれば、「現に在るもの」を得たことになり、「幸福であること」を得ることが可能である限りは、いつまでたっても、その時点で、常に「現に在るもの」を求めていることになる

それに、「生きること」への欲求は「存在すること」を求めているのであるから、もし「存在すること」が「現に在ること」に含まれるのであれば、「その生きること」への欲求は「現に在ること」への欲求であることになるであろう

それで、もしその欲求が「将に来たらんとするもの」や「次に来るもの」への欲求であるにしても、それは、「現に持つもの」や「現に在るもの」を求めているのであって、「過去に在ったもの」や「未来に来るであろうもの」を求めているのではない

つまり、その欲求は、「いまそなるものの存在」と「を求めている。換言すれば、「未来永劫にわたる持続」を求めているのではなくて、「いま現に在るものの、いま現に在ることを」を求めているのである

3
では、「彼は長い間幸福であったし、長い間自分の現で同じもののままだ」ということがについては、どうだろうか

たしかに、時間をかければかけるほど、それだけ正確に見たのであれば、時間が彼になにかしらの貢献をしたことになるであろう。だが、いくら時間をかけても、その間いつも同じものを見たのであれば、たった一度だけ見た人でも、それから時をものは同じである

4
しかし、長い間同じものを見た人は、それだけ長い間快楽を味わっていたのだ。しかし、「快楽を味わうこと」を「幸福であること」のなかに数えいれるのは、正しいことではないであろう

だが、これに対して、もし人が、「そのばあいは快楽とは、妨げられることのない活動のことである」というのであれば、彼はわれわれの探しあっていることと、同じことを言っているのである

5
では、どうだろうか。或る人は始めから終わりまで一貫して幸福だったし、別の或る人は後になって幸福となり、また別の或る人は始めは幸福だったけれども、後になって変わったとしたら、それでも彼らは同じ程度に幸福なのだろうか

それに、その「長い間持続する快楽」というものは、常に「現に在るもの」のみであるのであって、そのばあいの比較は、幸福のみを味わっている人びとの間のそれではなくて、幸福でない人びとの、幸福でない時点での、幸福であるあ人に対する比較である

そのばあいの比較は、幸福のみを味わっている人びとの間のそれではなくて、幸福でない人びとの、幸福でない時点での、幸福であるあ人に対する比較である

6
では、不幸な人のばあいにも、どうなのだろうか。彼は時がたてばたつほど、ますます不幸になっていくのではないだろうか

それにまた、他の災いたとえば長期にわたる苦しみとかまたしみとか、それに、この種のものはすべて、時がたてばたつほど、それだけ大きな不幸をもたらすのではないだろうか

しかし、もしそれらの災いが、そのように時がたてばたつほど悪いことを増大させるのであれば、なぜ、それらと反対の事柄や「幸福であること」についても、同じことが言えないのであろうか

たしかに、悲しみや苦しみのばあいには、「時間が悪いことを付け加える」と言えるであろう。たとえば病気が持続するようなばあいが、これに相当するであろう

なぜなら、病気がその人の持ち前となり、時間の経過につれて、肉体はますます劣悪なものとなっていくからである。もっとも、肉体が同じ状態を保ち、喜ばしい状態が持続すれば、究悪さも増えるからである

ただし、かつて生じ現在も仮定せつづけているのに目をつけて、すでに過ぎ去ってしまったものをそこへ加算して考えるばあいには、話は別である

ますます不幸になるのは、不幸の強度が上がるから

また、不幸な状態の場合にも、「時がたつにつれて、悪いことが増えてくるとも言えるであろう。不幸な状態が持続すれば、究悪さも増えるからである

とにかく、「ますます不幸になる」という状態は、その「ますます」という事態が加えられるからだけであるので、「より長い時間ひとしい」事態が持続するかぎりにおいてのみではなくて、「より長い時間ひとしい」ことを使うべきでもないのである

これに対して、幸福の方は、境界を持っているのであって、常に同一の状態を保っているのである。だが、もしここでも、時間の長さにたがって何ほどかの増大があるのだから、徳という点で大きく成長すればするほど、その人の幸福は大きなものとなるのであれば、より年限にわたってつづいている幸福を数えて賞賛しているのではなくて、その幸福がより大きなものとしてあるその時点で、より大きなものになっているものとしてあるその幸福を賞賛しているのである

それに、「より長い時間ひとしさを保っている」事態というものは、同時に存在しているわけではなくしん、また変する人、人はより長い時間ひとしいことをを使うべきでもないのである

なぜなら、そのばあいには、もはや存在しないものを、存在するものと一緒に数えあげていることになるのである

7
しかし、「現に在るもの」だけを考えるべきであって、「現に在るもの」が「すでに過ぎ去ってしまったもの」と一緒に数えるようなことをしてはならないのであるから、なぜにわれわれは、時間のばあいにも、これと同じことをしないで、過去を現在と一緒に数えて、より多いと言うのであろうか

で、もしそうだとすると、なぜにわれわれは、時間が持続すればするほど、それだけ幸福を増大すると、言わないのだろうか

そのばあいには、われわれは時間の分割に対応して、幸福をも分割していることになるであろう、ということは、つまり、逆に考えて、「現在」で幸福を測定するなら、われわれはそれを分割不可能なものとしているということになるわけである

ところで、時間の場合には、たとえそれがもはや存在しないものであっても、これを数えることにおかしさはない、などなら、たとえすでに死んでしまった人びとのばあいのように、「すでに生じてしまって、もはや存在しないもの」の数を数えることも、可能だからである

だが、「もはや存在しない幸福が、現に在る幸福よりも大きいと言うのは、おかしなことである。なぜなら、現在を超えて広がっている時間は、「もはや存在していないこと」を受け入れ切れずに、「幸福であること」は、それが「存在していること」を必要とするからである

そして、一般に時間の広がりは、「現在」の持つ或る種の単一性の拡散を意味するのである。そもそも、「時間は永遠の似姿であると言われる(プティマイオス[37d5])のも、もっともなことであるが、それは似姿が、自己自身の拡散性によって、永遠のもつ恒常性を消し去ろうとするからである

それゆえ、もし「幸福であること」が「すべてたち」と一致するのであれば、明らかにその生は、真実在の生と一致するとみなさなければならないことになる、なぜなら、真実在の生が、もっともすぐれた生だからである

つまりそれは、何らかの仕方で永遠に属する限りは自らの立場を維持しているけれども、似姿のなかに完全にはいりこんでしまうと、破壊されてしまうことになるのである

したがって、われわれはその生を時間を尺度としてではなく、永遠を尺度としてもちいることになる

だが、後者は「より多いものでもなければ「より少ないおの」でもなく、また、なんらかの長さのあるものでもないのである。それは非延長的・非時間的なものとして、ただそれとして有るのみなのである

してみると、「有るもの」を「有らぬもの」に結びつけたり、時間や時間的な「常に」を永遠に結びつけたりしてはならないし、広がりのないものに広がりを持たせることもしてもならないのであって、そのすべてを全体として取りあげねばならないのである

——とにかく、もし君がそれを取りあげることができれば、のことであるが——

つまり、そのばあいには、君は時間の不可分性を取りあげるのではなくて、永遠の生を、すなわち、「多くの時間からなる生」ではなくて「全時間(パース・クロノス)からなり、すべてが一体をなしている生」を取りあげなければならないのである

8
だが、これに対して、もし人が、「過ぎ去った事柄の思い出が現在も残っているばあいには、その思い出は、より長い間幸福の状態を保っているように、より多くのもののもたらすことになる」と言うのであれば、その人は、どんな思い出のことを言っているのであろうか

より長い幸福が、より多くをもたらす、と言うのであれば、思慮はより思慮深くもない、昨日味わった快楽が、料理を食べもしない今日により深く味わうことができるということになる

もし以前の自分の思慮深い行為の思い出のことであれば、彼は「さらに思慮深い人にする」と言っていることになるであろう

それとも、快楽の思い出のことを言っているのであれば、彼は幸福な人のことを、「度はずれた数楽を必要とする人」や「現在の歓びに満足していない人」として語っていることになるであろう

思慮のばあいも同じで、「昨年は思慮深かったことを思出しても、幸福にはなんら寄与するところはないであろう

しかしながら、快楽の思い出に、どんな快さがあるのであろうか、それはたとえば、人が「昨日の料理で味わった快さ」のことを思い出すのに似ているとい え ょう、それとも、彼が料理の快楽を味わったのは十年前のことだったとしたら、彼はますますもっておかしな人だということになるであろう

9
だが、もしその思い出が美しい事柄の思い出であれば、どうして、そこに語るに足るものがないことがあろうか

いや、そのような思い出にふけることは、現時点において美しいものに不足している人のすることであって、彼は現に美しいものをもっていないから、過去の美しい事柄の思い出を求めているのである

10
しかしながら、多くの時間があればこそ、人は多くの美しい行為を実践できるのであって、ほんの束の間の幸福しか得ていないひとは——ただ、しばしを多くの美しい行為を実践していない人でも「幸福な人」と呼ぶことができたのは、のことであるが——それら美しい行為には無縁の人なのである

いや、むしろ、「幸福は多くの時間と行為を通して得られる」と言張する人は、「もはや存在しない過去のものとなってしまった多くの事柄」と「現に在る一つの事柄」から「幸福であること」を組み立てているのである

そこで次のことを、すなわち、「長時間つづいて幸福であることは、行為の数がふければふいほど、それだけ幸福の度合いを増していくのかどうか」を調べていかなければならない

だからわれわれは、「幸福であること」を現世の領域に据えたうえで、「幸福であることは、長つづきすればするほど、それだけ大きなものなのかどうか」を調べて きたのである

さて、まず第一に、人は実践活動に従事していなくても幸福であることができるし、それも、実践活動に従事している人よりも少なからず、いや、はるかに幸福であることができるのである

そして思慮深い人は実践によっても善さを享受するが、その善さは、実践によって生じたのではなければ、実践の結果として生じたものでもなく、彼自身の内面にもっているものから生じたのである

次に、実践活動は、それ自体では善さをもたらしたりはしないのである。善さをもたらすのは、人の内面的な状態であり、その状態が、まじめの実践活動を美しくするのである

すなわち、祖国を救うことは、劣悪な人でもこれを行うことができるであろう、祖国を救うことに伴う快さは、たとえ他の人がこれを行っても、その人に生じるであろう

それゆえ、幸福な人の持つ快さもそのようなものであるのではなくて、人の内面的な状態が、幸福な、また幸福に伴う快さであるとすれば、その快さもたちすのである

これに対して、「幸福であることは、実践活動に依存する」とみなすのは、「幸福は徳や魂に関係がない」とみなす人のすることである

というのも、魂の活動は知恵を働かさせることにあり、そのような仕方で自己自身のなかで活動することにあるからである。そしてこれこそ、幸福な状態なのである